

-エッセイ-
救急車に乗って

天見谷行人

先日高熱が出て救急車で病院に行きました。その経験から思ったことをエッセイにしてみました。

一救急車に乗って一

また救急車に乗ってしまった。

これで三回目である。

一回目は激しい頭痛と嘔吐でのたうちまわった。

二回目は扁桃腺炎で40℃の高熱が出た。

三度目の今回も扁桃腺が腫れ、39℃の熱が出たための救急搬送となった。

どの回にも共通しているのは、ぶっ倒れたわたし自身が救急車を呼んだ、という点である。

私は一人暮らしである。

最近は一人暮らしが増えているようだ。特にお年寄りの一人暮らし、いわゆる独居老人が増えているのだと言う。

私もすでに年齢は五十一歳。ええ歳こいたオッサンなのである。このままの生活スタイルを続けると、間違いなく独居老人の仲間入り、ということになりそうだ。だからと言ってここで、政府の高齢者福祉政策云々を大上段に振りかぶって一説ぶち上げたいとは思わない。

私は救急車の中で横たわった。病院へ救急搬送され、適切な処置を施され、無事に自分の部屋に帰りついた。生還した。それを三回も体験しているのだから、案外しぶといと言うか、変なところでツキがあるらしい。

そう言えば、なぜか自分は今まで何度か自分の命を危険に晒してしまった事があった。自慢する事ではないが、自ら命を絶とうと試みて複数回失敗に終わっている。またある時は、オートバイで高速道路を走行中、居眠り運転をしてしまい、100km/hを超えるスピードで転倒したが、なぜかかすり傷ひとつなかった。

ただ私は自分自身に言い聞かせている事がある。

これらの「ツキ」にあぐらをかくなぞ、という戒めである。

ツキとか運とかを司る神様に対して謙虚でいたいと心がけているのである。

以前の自分ならこんな気持ちにはならなかった。「ツキの神様、運の神様、ありがとう」と素直に喜べなかった。

というのも、その頃の私は自分の事がとにかく嫌いで、どうやったら自分という存在を抹殺出来るのか？ ただそのためだけに生きがいを見つけていたと言っていい。

そんな私がなぜかしぶとく生き続け、とうとう五十歳を超した。何故自分はしぶとく、のうのうと生きてこれたのだろう。本当に人の運命なんてわからない。

運命の神様は気まぐれである。つくづくそう思う。

というのも自分の身近なところで、若い人が二人亡くなっているからだ。

一人は職場の同僚の奥さん。

バーベキューパーティーを職場でやった時に、ダンナと子供を連れて参加していたのを思い出す。

その人がある日、昼頃「頭が痛い」と言い出したそうだ。

夕方救急車で運ばれ、搬送先の病院であっけなく息を引き取った。

僕たち会社の同僚は、お葬式に出席した。ダンナは呆然としていた。ただ涙を流す事しか出来なかった。

二人のまだあどけない子供が残された。自分たちの母親が亡くなった事をまだ理解出来ない子供たちが、葬儀会場で楽しそうに遊んでいる姿がよけいに参列者の涙を誘った。もう一人の例。

これも私が四十代で失業し、やむなくアルバイトをしていたときのこと。

彼はその会社の新入社員だった。バイト先は接客業である。

その場その場で段取り仕事が出来ないといけない。

彼はそんな機転を利かせる事がちょっと苦手だった。

先輩社員達（といっても彼らも二十代後半の若者だった。）から彼は疎ましく思われていた。彼は悩んでいたようだった。元気づけようとわたしは

「今度の休み、いっしょに飯でも行こうや」と誘った。

「ありがとうございます。でも、今度の休みにちょっと用事がありまして」と彼は嬉しそうに、にこやかに答えた。

わたしは二十年に及ぶ営業経験からいうけれど、彼の笑顔は百万ドルの笑顔だったと今でも信じて疑わない。きっとじっくり何年もかけて仕込んでやれば、その笑顔で最高の接客、最高の営業マンになったことだろう。

「これ持っててください」

なぜか、彼はその時自分の名刺を一枚私にくれた。

彼はある、先輩女性社員に恋をしていた。私が食事に誘ったその日がデートの日だった

らしいのだ。

そしてデートの翌日。夜、彼の車が橋の上で見つかった。エンジンはかけっぱなし。シートには彼の携帯電話がそのまま残されていた。

彼は橋の上から身を投げたのだ。



後に先輩女性社員が交際を断った事が明らかになった。直接の動機はそれらしかった。その女性社員ももちろんショックを受けた。一ヶ月近く会社に出て来れなかった。また、職場の私たちもショックを受けていた。嘘だと思いたかった。しかし現実はかくも厳しい。彼の遺体は二週間程して見つかった。

なぜ彼は私に名刺を一枚くれたのだろう。私はその名刺をじっと見つめて思った。なぜ、こんなにも若い人の命があっけなく天に召されなければならないのか？ 全く神様は理不尽な事をする。

そのくせ、わたしのような、どうでもいい命は地上でのうのうと生かされている。生きるがままに生きよ、とでもいうように。

ただ、最近の私は生きる事について、ちょっと真面目に向きあってみようよとこの歳でようやく思い始めた。それは生きる事そのものが、徐々におもしろく感じられるようになってきたからだ。

先日、岩波少年文庫の中から「イワンのばか」という本を読んだ。

ロシアの文豪トルストイが子供にも読めるようにと書いた、短編の童話ないしは寓話で

ある。



その短編集の中にそのものズバリ「人はなんで生きるか」というのがある。

人間の中にある天使と悪魔をこの作家は実にわかりやすく、噛み砕いてじっくりと語ってくれる。

皆が争って、金を儲けてやろう、器用に生きよう、要領よく生きようとする中で、馬鹿で愚直で不器用に生きていいのだよ、と優しく心を解きほぐしてくれるお話である。まるで優しいおじいちゃんが子供に、昔話を語って聞かせているかのような雰囲気を持っているのである。

こんな境地に達する事ができたのも、トルストイが長生きをしたという物理的、生物学的な要因を無視出来ないと思うのである。

どんな人間でも長生きをすればそれだけ多くの体験をするだろう。その体験を生かすも殺すも本人次第だ。当の本人が人生から何がしかの真理なり、あるいは人生そのものの意味を真剣に問いたい、そう望むのならば、ぶっちゃけたはなし、長生きしなけりゃ分るはずないのである。

救急車の中で三回横たわるという体験から、ようやく私にもそれに気がつく時がやってきたのである。

少なくとも今の私には生きること、生きてゆく事が面白い、と感じられるようになってきている。

晩年のトルストイという物書きの裕福なじいさんは、金や物の所有、物欲と言ったものを捨て去ろうとした。人の幸せはそんなもので実現出来るものではないのだ、そうおもったのだろう。それは自分の書いた本が売れて、裕福な生活が出来た事で改めて気づいた事だったのである。

自分の生活に疑問を感じ、世の中に疑問を感じた彼は、自分の書いた本の著作権さえも他人に譲ってしまおうとしていた。やがて家族と対立し、一人、トルストイじいさんは家出する事になる。そういう生き方もあっていいと僕は思う。

幸いにも私も一流企業と言われるところで仕事をした経験があり、結構な生活を送った時期があった。

そのときは有頂天になり、鼻高々だった。一流企業の金色に光り輝く社員バッジが自分のアイデンティティだと思っていた。

しかしそんな私もリストラでクビになり、病気を抱え込み、社会的な地位も名誉も財産も全て無くした。

今や生活保護を受けている人が羨ましいとさえ思えるほどの、最低の生活水準である。しかし他人からみればそれこそ悲惨極まりない生活が、妙に楽しく感じられている。本当に自分でも不思議である。

全てを捨て去ってもまだ自分の精神や心は、むしろ豊かになってきているように感じるのだ。

今日一日何か美しいものに出会ったとか、今日誰かと話をした事が面白いと感じられたり、今日一日の終わりに笑顔でいられたりすることが何より大事だと思えるようになってきているのである。

もしかすると明日自分は四回目の救急車のご厄介になるかもしれない。そしてもう二度と自分の狭いアパートの部屋に戻ってこれないかもしれない。

今の私はそれでもいいのだ、と思えて来ている。何より、今日一日を精一杯命の限り生きたいのだ。

本当に自分がやりたいと思っている事をキチンとサボらず楽しめているか？と聞かれれば、まだまだ修行が足りませんと答えるしかない。

でも努力はしているつもりである。

また、どんな仕事でも、どんなささいな遊びでも、手を抜いてはいけないと思っている

。

今、私はアルバイトで生活を支えている。

目の前の段ボール箱をひたすらベルトコンベアーに載せてゆく。こんな単純作業でさえ、全身全霊を傾けてやり遂げよう、作業の中に何か楽しみを見つけよう、そう思えるようになってきている。

明日、自分にどんな災いが降りかかるかもしれない。しかし、明日自分が生きているかどうかは、明日の朝目が覚めてからわかる事だ。

ならば今を精一杯生きてみよう。一瞬一瞬を大事にしよう。そして自分の身に偶然起こる事を大事にしよう、と思っている。

今日一日を精一杯生き、日が沈んでゆくのを微笑んで見つめてみたい。

私はそういう人間になる事にあこがれを感じる。

まるで、宮沢賢治の描く「木偶の坊」と呼ばれる人間のように、あるいはトルストイの描く「バカな男イワン」のように。



一日を終えて床に就く時、今日自分は生きる事に満足したか？と自分に尋ねてみる

。

いつの日か、微笑んで「うん、満足した」と言って眠りにつける日が来るのを楽しみに、今日を生きていきたいのである。

一エッセイー救急車に乗って

<http://p.booklog.jp/book/47597>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47597>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47597>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.